有馬全集 第十八卷

何凡全集

第十八卷

岩波書店

昭和三十九年十月十二日　第一刷發行
昭和四十七年七月　五　日　第二刷發行

荷風全集第十八卷
定價八百五十圓

著者　永井壯吉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

©第十八回配本　精興社印刷　牧製本

目　次

女優ナナ　其他……一
戀と刃……三
女優ナナ……一二九
洪　水……一八七
エミールゾラと其の小説……二三一
女優ナナ、廣告文……二五三
ゾラ氏の故郷……二五五
ゾラ氏の「傑作（ラーブル）」を讀む……二五九
ゾラ氏の作 La Bête Humaine……二六五
モーパッサンの扁舟紀行　其他……二六九
氷る夜……二七一
モーパッサンの扁舟紀行……二七七

窓の花（カチュル、マンデス）……三〇五
水かゞみ（アンリイ、ド、レニエー）……三二三
二人處女（マルセル、プレヴオ）……三三三
極東印象記（*Henry Myles*）……三三三
佛蘭西の新社會劇　其他……三四三
佛蘭西の新社會劇……三四五
佛蘭西自然主義と其反動……三七五
藝術と藝術の製作者……三九三
伊太利新興の閨秀文學……四〇三
西洋音樂最近の傾向　其他……四三一
西洋音樂最近の傾向……四三三
歐洲歌劇の現狀……四五五
歐米の音樂會及びオペラ劇場……四六五
佛蘭西觀劇談……四七九
佛蘭西現代の小說家　其他……四八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

佛蘭西現代の小説家……四八七
佛國に於ける象徴派……四九七
佛國文壇の表徴派について……五〇三
小説壇の現在及び佛國小説の近事……五〇九
ベルレーヌの傳記を讀みて……五一五
ピエールロチと日本の風景……五二一
後　記……五四一

女優ナナ　其他

戀と刃

小引

本篇は其の原書をLA BETE HUMAINEと云ひ、佛國の大小說家故エミールゾラ先生の著作ROUGON MACQUARTT叢書中の一部なり。此の著作は其の表題の示すが如く、人間の怖るべき獸性を描きしものにして、一篇の主人公としては、酒毒の遺傳より來る不思議なる色情狂の患者を選びたり。多數なる先生の著作中、其の最も變化に富み、波瀾極りなきものを問はゞ、恐く此の篇を以て第一と爲べし。全體十二回四百ページ餘の大册なるが、佛國にては一時に數十萬部を發賣したりと云ふ。以て其の如何に有名なる著作なりしかを知るに足る。今、此れを譯して、僅々二百頁餘の短き物語となさんとす。云ふまでもなく、余は完全なる原書の面影をうつさんとは爲さゞるなり。唯だ篇中重立たる事件の推移を叙し、原著の概略を綴りたるに過ず。且つ其の方法も、日常余が先生の著作を反覆熟讀しつゝありし結果、此に其の記憶を繰返して筆を進めたるなり。普遍なる多數の讀者に了解せられん事を思ひしより、地名人名とも日本化したるが上に、原著に於ては其の描寫の精巧を極めたる先生が獨特の科學的寫實の筆致等は、遂に全く除かるゝものとなりぬ。こは余が、猥に原著作を汚したる罪に對し殊に一言せざるべからざる事とす(荷風小史)

第一

湘南鐵道會社の横濱停車場の構内に、驛夫や車掌達の合宿所になつて居る五階造の建物があるが其の五階の窓から首を出して、灰色した二月半ばの空の下に廣がる構内の混雜、機關車の往來抔を眺めて居るのは、三浦停車場の驛長助役を勤めて居る原田剛助である。剛助は何時も社用で横濱へ出て來る時は、屹度女房のお勢を伴ひ、此室でしんみり差向ひの晩餐を食る事を、此上なく嬉しい事にして居るので。尤も此の室の持主お勝と云ふのは、機關車の火夫嘉七の女房で、以前はお勢の乳母と云ふ關係を持つて居るのである。で、剛助は今日も、例の如く樂しい食事を爲たいと、先刻から伊勢崎町の方へ買物に行つた女房の歸りを、今か〳〵と待ちあぐんで居たが、餘りの退屈に、彼方此方と室の中を歩き廻りながら、頻と女房お勢が事を思ひつゞけて居るらしい。

剛助は今年四十になつたけれど、頑丈な身體は少しも年老つた樣子は無く、恐しい頤髯を短く刈つた其の顏色は、何時も燃ゆる樣に赧んで居て、兩方の瞼が弛んで居る樣は何處となく嫉妬深い性質らしく思はれた。房州の生れで、父は荷馬車の馭者であつたが、剛助は幾年前軍曹になつて兵役

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

を濟した後は、會社の驛夫に雇はれ、重い列車を彼方此方と動して居た。然し、其から杉田停車場の驛夫長に昇進した時、始めて今の女房のお勢が、大久保社長の令孃と一緒に往來するのを見初めて、運好く結婚する事が出來たのである。此れは全く剛助の身に取つては、小說にでも有りさうな事と思はれたであらうが、然し此のお勢と云ふのは植木屋の孤兒で。其の母親は娘を產んで難產の爲めに死んで了ひ、父は十三の時に矢張死亡つて了つた處から、お勢はかのお勝乳母の手に引取られ、間もなく大久保社長のお屋敷へ小間使に上つた。令孃悅子のお相手方がた、一緒に學校へも通へる仕合者となつた。で、剛助の處へ嫁入してからも、相變らず、社長のお氣に入りで、其等の事から夫の剛助までが、自然と信用を得たものか、彼は間もなく三浦停車場の驛長助役とまで昇進したのである。

剛助は餘り女房の歸りの遲い事から、何か譯のある事では有るまいかと、遂には其の嫉妬深い心から、當度もなく妙に氣を廻しだしたが、折よく戸を明けたのは、待ちに待つた女房のお勢である。

年頃は二十五位、すらりとした優しい樣子であるが、肉付の好い身體で、鳥渡見ると、面長の容貌は其れ程美しいとも思はれ無いが、近く寄ると何處となく愛嬌のある男好のする顏立である。

「私ですよ。急いで來たもんだから、眞實に熱い事ねえ、つい馬車に乘なかつたから……わざわざ車を雇ふのも贅澤だと思つて、一生懸命になつて步いて來たんですよ。眞實に熱いぢや有りませ

んか。」

「だが、お勢。伊勢崎町から歸つて來るのに何時間かゝると思つてるんだ。」と、剛助の聲は荒々しかつたので、お勢は、

「あら、あなたも分ら無い事ねえ、私が心配してるのは所天も能く知つてる癖に……。」と聲を潤ました。

此の優しい女房の一言に、嫉妬深い剛助は忽ち疑念を晴らしたらしく、最う可愛くて堪らぬと云ふ樣に、屹とお勢を引寄せて、激しく幾度ともなく續け樣に接吻したので、お勢は恰も鷲に攫れた雀の樣に、唯だ夫の爲す儘に、生すなり殺すなり其身を任して居ると云ふばかり。然し此方からは一度も接吻を爲返す樣子は無かつたのである。何時も此樣に唯だ無意味に柔順な女房の樣子、剛助は遂に聊か不滿足らしい目容でお勢の顏を見た。

第二

然し剛助は軈てお勢を抱いた手を放して、今日横濱へ呼寄せられた用事の始末から、別に心配する事では無かつたと云ふ事を話した。お勢は室の時計を眺めて、

「あなた、もうそろ〳〵瀛車に乘る準備を爲ないぢや不可ませんねえ。」

「あゝ。さうだな。」と夫婦は其の儘話を途絶して、窓へ凭れながら構内の有様を見遣つたが、其の間剛助は又もやお勢の身躰を弄ばうと思つたのか、ぢつと手を握つて其の、指に穿めた指輪を弄つて居た。すると、お勢は何時か夢見る如く深い聲音になつて、「私の指環……大久保の旦那様がお屋敷で私に下すつたのだが……。」と我を忘れて呟いた。

「え？　お勢。」と突然剛助は非常に驚いた様子になつて、「お前、其の指環は旦那様から頂いたのだつて？、お前は死んだ母様の形見だと、幾度となく乃公に云つて居たのぢや無いか。」

お勢は鋭く夫の顔を眺めたが、何と思つたか、「いゝえ、其様事云つた覺はありませんよ。」

「何、覺が無いツて？、これ、お勢、何にも隠立をするにや當らないぢや無いか。旦那様がお前に物を下さるのに些とも怪しい事は無い。何故お前は其様隠立を爲て居たんだ。さア、其れを話さない中は承知しねえぞ。」

「だつて、其様事云つた覺はないんですもの……。」とお勢は何う云ふ事か、愚にも最初の我を張つて居るので、唯ださへ疑ひ深い剛助は最う容易ならぬ顔付になつて、「やい、お勢。何故隠立を爲て居やがつた。お前は屹度、何か後暗い事を爲て居やがつたに違ひ無い。よし、最う此の儘にやア濟され無えぞ。」

「だつて、私や知らない……其様覺えはないんだもの……。」

「まだ、其様事を吐しやアがるな。お勢、隱したつて駄目だ。大久保の社長さんは、二十年以來奥様なしの男暮しだ……手前はお小間使に上つてる時から、何か後暗い事を爲て居やがつたらう。よくも今迄乃公を欺して居やがつたなア。さア、眞直に白狀しろ。白狀しろ。」

云ふ中にも燃え上る嫉妬に驅られて、剛助は最う正氣を失つて了つたらしく、矢庭にお勢を撲倒した。

「あれ——。」

「やかましい、靜に爲ろい。」と頭髮を摑んで、續樣に亂打しながら、「さア、白狀しろッ。白狀しろッ。」

宛然、鬼の樣な拳である。其の以前に驛夫を勤めて、重い荷物や客車を動した大力に壓潰されて、お勢は最う泣聲どころか、何とも口を利く事も、息をする事も出來ない程である。

「畜生。まだ白狀しねえな。云はねえ中は……お勢、撲殺すから然う思へ。」

猶も撲り續けたのみか、今は足蹴にするのである。半死半生になつたお勢は、全く殺されると思つたのか、一心に剛助の腕に嚙り付くと、剛助は振拂ひながら叫び續ける。

「白狀しろ〳〵。」

「爲ます、白狀しますよ。全くです。白狀します。堪忍して下さいよ。」

「うむ。白狀したな。眞實くなんだな。畜生、覺えて居ろッ。」

剛助は狂亂して、再びお勢の頭髪を摑むと共に、傍の壁の下に引摺り倒して、全身の怒を籠めた力で散々に蹴返したが、軈て、片息になつて倒れて居るお勢の前に胡坐を搔いた。

お勢は最う亂れ〳〵た裾を直す力もなく、弱々しい眼で剛助の顏を見ると、夫は血走つた眼を釣上げた儘、ぢッとお勢の顏を見詰めて、猶も其の怖しい拳を顫して居たが、忽ち決心した樣に立上るかと思ふと、

「生かしちや置かれ無い。乃公が生きてるからは、何でも彼奴を殺し了ふんだ。」

第三

お勢は怖しさに堪へないけれど、何とも云出す事が出來なくて、唯だ顫へながら剛助の顏を見詰めて居た。窓外は段々に暗くなつて、横濱の街の方には、漂へる薄暮の微光が、人家の窓を白くして居たが、プラツトホームには最う瓦斯の光が輝き初めて、相變らず機關車や列車の動く音が何となく穩かならず聞えるのである。剛助は最うすつかり心を決て了つたらしく、薄暗い室の時計を見て、「五時二十分まだ、大丈夫だな。」と叫んだ。そして、室の棚から墨壺と筆とを取出したので、お勢は何の事かと不審さうに、

「あなた。何うするの？　何處へか手紙を書くんですか。」

「うむ。彼奴へ遣るんだ。お勢、此處へ坐れ。」と無理强ひにお勢を机の前に引据ゑて、「さア、お前が書くんだぞ。今夜六時半の急行列車にてお立ちなさるべく、彼地へお着きなさるまでは人の目に掛らぬ様なされ可く候——斯う書くんだ。」

「だつて、あなた。其れを書いて如何するんだか、話して下さら無い中は書けないぢや有ませんか。」

「何でも可い。書きさへ爲りやア分るんだ。」

「いゝえ、話さない中は書けませんよ。あなた、一體何うする積なんですよ。」とお勢は何となく空怖しい氣がして堪らないのである。

「何故、書かないんだ。」と剛助はお勢を脅し付けた後、鷲の様な手で、痛い程お勢の柔い優しい手を摑んで、先づ無理やりに筆を取らした。

「可厭、可厭。可厭ですよ。話して呉れない中は書きませんたら……。」と云つたけれど、然しお勢は凡て男から無理に强ひられると如何しても反對する事の出來ない物優しい一方の、意地張の無い哀れな女の性質として、到底手紙を書ない譯には行かないであらう。

「さア、早く書け。」と剛助は又叫んだ。案の通りお勢は痛々しい手で、到頭其の云ふが儘の手紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook